

参考文献「福山町郷土誌」岩崎行義編（昭和29年9月刊）

第二編 先史時代

第一章 縄文式文化



シラス土壌砂防工事

縄文文化に先行する時代として、洪積世の先土器文化（旧石器文化が存在）包含層（黒褐色有機質層・砂質ローム層）が標高五百メートル前後の高原に遺跡が点在している。鹿児島県では昭和40年10月、出水市場高原の切

り通しのローム層崖下より、一片の黒曜石製の細石刃を発掘したことで脚光を浴びた。

縄文・弥生土器に先行する先土器時代の石器を、敲打器（ハンドアックス）、刃器（ブレイド）、尖頭器（ポイント）、細石器と4区分する。石を打ちかいてつくるには3つの方法がある。石核石器とか握斧といわれるもので、水分を含んでいるときはがしやすい石を、別の石で打ちかいて、西洋梨の形にして、そのふちの両面を細かく打ちかいて刃をつける。反対側を握って使用する。刃器はその逆である。剥片土器ともよばれる。打ちかくときのかけらの方を用いる。手斧（ちょうな）式石器、石核石器にいて、片側だけを細くうちかいて刃をつける。これら旧石器前期の石器から、後期旧石器（今から5万年ぐらい前）の時代になると、石刃とよばれる細長い両刃のものが現われる。現代のナイフ状のもの、のみ状のもの、



矢じりや槍先として使用したもの、凹状の内側に刃をつけ、手もとにひいて細工するもの、キリの役目をするものなどがあらわれる。

石器も石を打ちかく打製石器から磨製石器へと変化する。

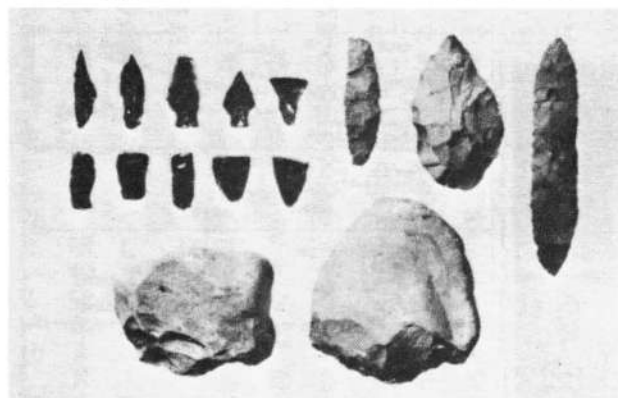
打製石器の材料は美しい黒曜石などが使用されていたが、磨製になると石材は黒曜石にかわって、砂岩や粘板岩などにかわり、槌で面をたたいて滑らかにしたり、砥石で磨いたりした。日本の縄文文化は、磨製石器・土器・織物など多くの新石器文化の条件をもつていながら、農耕の存在はないとされてきた。稲作が九州において縄文までさかのぼりうる可能性をもちながら、農耕論の決定的弱点として栽培食物が出土せず、決定的農具が発見されていないということである。礫器や握斧形石器は万能な道具として使用された。それにつづいて石塊からはぎとったような石片を利用した刃器の時代があり、石の尖端をとがらせた尖頭の時代がつづき、微細な石片を、骨や木製の棒にはめこんで使用する細石器の時代があった。この細石器を最後に、新時代である縄文文化に転換する。尖頭石器は狩猟用の道具であり、細石器は鋭利な側縁を利用し、溝をつけた木に埋め込み、そこに樹脂やアスファルトを流しこんで固定し、木や石や骨角器の加工・彫刻用の道具として使用された。細石器は長さ2〜3cm、幅4mm以下で、その製法は石刃と同じく、原石の周囲より縦長の剥片を欠ぎ

とったもので、原石の中心部は円錐形あるいは舟形の石核として残る。

今から約1万年前の洪積世の末期、わが国が大陸と地つづきになっていた時代に、われわれの祖先の生活があったということである。土器が伴出しないのでプレ縄文時代とよんでいる。人類学的にa、日本列島の人種交替。b、日本石器時代人と南方、大陸の人種との混血。c、日本石器時代人が環境によって変形した。以上三つの説がある。それは縄文人と弥生文化・古墳文化の民族は同一か、という考え方から出発している。結論的に

は縄文の人々は弥生時代の人々をつうじて変化し、古墳文化に進化しているということである。

無(ノン)土器文化・先土器時代・プレ縄文時代の調査・発掘はまだ今後の課題にまつところが大きいし、洞窟調査なども不十分である。



先土器時代遺物、礫器(下)、尖頭器(右端)
(九州歴史資料館蔵)

石器が包含されているローム層が酸度がたかく骨角器などの保存に適していないということもある。

群馬県岩宿の画期的発見よりまだ30年しかたっていないが、精力的な研究がつかさねられ、より正確なプレ縄文文化の編年が進行中である。戦後の考古学の輝かしい業績の一つである。

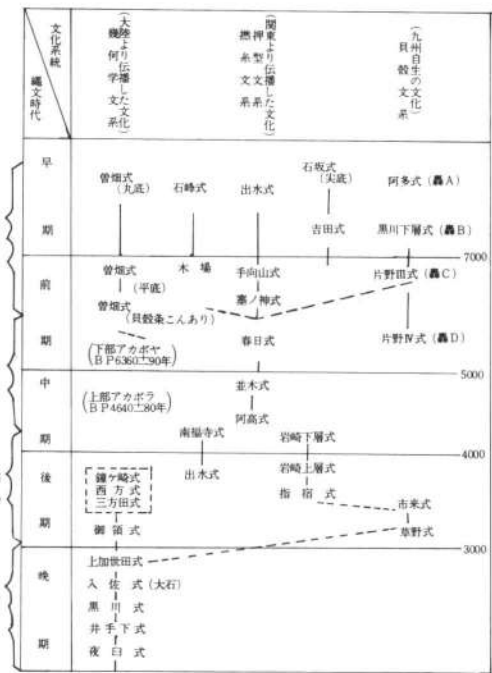
日本の洪積世を象徴する「赤土」、関東の赤土は「関東ローム層」とよばれる。火山より噴出した火山灰が堆積したもので、この赤土の上層には黒色の腐植土（黒土）で薄くおおわれている。これが沖積世の堆積である。

日本では縄文以前の文化は存在しないとされていた。この通説が戦前では普通であった。戦後になって、ローム層より



霧島の韓国高千穂

南九州縄文文化の編年



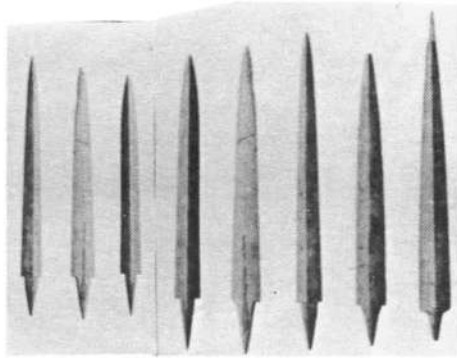
図表右の数字は現在より推算した年数で、ラジオカーボンによる測定年数を参考にしてあられず。（岡口真徳氏による）

下層に土器を含まない石器の存在が確認された。人間の遺物であった土器は沖積層にあるので、ローム層（洪積世）まで遡及しなかったためである。

地球上に大規模な氷河がしばしば発達した第三紀の後半から第四紀の洪積世にわたる期間に原始人類が出現して、最後の氷河期とともに絶滅した。同時代の地層は川内や志布志、青島、種子島などに散見される。洪積世から沖積世（現世）に移り、最後の氷河が退いたのちの時期に、水陸の分布および生物界がほぼ現在と同一の時代となった。海の退却は絶頂に達し、陸地は大小の火山群から噴火した火成岩で埋ってしまふ、地質時代の一つのクライマックスが展開された。火山

がまだ地の底にうごめいていたころ、すなわち五千万年くらいまえに地下深くから噴出した火成岩に、紫尾、高隈、肝属の各山塊や屋久島、大島にあらわに肌をさらしている花崗岩がある。長い年月に表土が洗われて露出している。この火崗岩の置きみやげに、谷山の錫、屋久島のタングステン、高隈の銅、錫、タングステン、モリブデン、ウランなどの貴重な地下資源がある。

林立する火山、霧島は二十三の小火山のあつまりだし、そのふもとの始良、出水郡境にも二十をこえる小火山があった。その野山に蜂の巣のようにトロイデ型のかっこおのよい山が火山として活動していた。大小無数の火山、その火山から噴出する熔岩、野山は大火事になり、海中にも、大音響とともにしきりに火柱があがって地獄の形相そのものであっただろう。私達の郷土、その名を始良カルデラ火山という。火口の広さ四二九平方*、その裾野に鹿児島県がすっぽり入ってしまった。もう火山だった。



石鉄 (せきぞく) (九州歴史資料館蔵)

カルデラという名の陥没火口は、火山の高さより噴火口の大きいのを特長としている。霧島火山帯には南から鬼界(硫黄島、阿多(指宿)、始良、阿蘇の四カルデラがあって、始良カルデラは、世界一の定評のある阿蘇カルデラよりさらに五〇平方*。広いという大規模なものである。「その始良火山

の熔岩だまりに空洞ができ、それが陥没して今の鹿児島湾ができた。はじめ海水はひたひたと霧島のあたりまで満ちていたらしい。この地溝に新しい火山が噴出した。霧島火山、蘭牟田池火山、桜島、開聞岳火山などがすべてそうである。桜島も現在島ではないし、霧島も島ではありえない。錦江湾の北の方は加久藤越の下に達していたという。また桜島は正熔岩、約三十億*の噴出により島の東側、幅五〇〇*の海峡を埋め、桜島と大隅半島を陸続きにしてしまった。人類以前の、壮大な天地創造のドラマであった。昭和52年8月の北海道有珠山噴火の噴出物が2億*といわれている。10*積み



縄文式土器<注口土器, 鉢, 深鉢>
(九州歴史資料館蔵)

ダンブカーで2千台分になる。

ブレ縄文式文化は実際に手がかりとなるものが残存しない。大正九年出水市沖田の出水貝塚から三千年くらいまえの馬の骨が出た。東北大学の長谷部言人教授は馬の弥生時代渡来説を新石器後期渡来説に訂正した。昭和二十八年と二十九年に男女五体の人骨が掘り出された。遺体は完全な形でこのり、しかも狩猟時代前後期のもので五千年くらいと推定された。

縄文式土器の複雑な文様、形状に比し、弥生式土器はすべて単純化され、画一化してくる。生活様式の投影であり、変化である。縄文土器は個性的である。大量生産の時代になると個性が失われるということであろうか。

縄文式土器は黒色をおび、弥生式土器（赤褐色系）と簡単に判別できるし、焼成度約五百度の縄文式に対し弥生式は焼成度千度前後だから、肉薄で硬質である。縄文式土器の早期・前期の文様は縄文・撚糸文・押型文・貝殻文などで、中期は隆起文、後期は沈線文である。大正7年4月に小廻の私立福山中学校（現福山高校）の敷地内から、多数の土器・石器が発掘された。土器の型式としては御領式（熊本県御領貝塚を基調とする、後期）、市来式（鹿児島湾沿岸より熊本・佐賀に分布出土する）などで、石器は石斧、石鏃、軽石、石偶（石製人物像）などであった。鹿児島県下では押型文系の曾畑式（前期）といわれる土器が、大口、伊佐、知覧、西之表に出

土し、水俣、八代あたりとの交易が判明してきた。縄文早期に属する土器は南九州にはすくないとされていたからである。南九州や北海道あたりを東日本に対して、周辺文化とよんでいた。当時の全国人口を約三十万人前後と推定している。南九州は二、三万人の人口だったと想定する。たとえば黒耀石の交易範囲でみると北海道十勝岳、長野県諏訪の和田峠、九州の阿蘇山など半径二〇〇〜二三〇*の周辺まで交易範囲である。食糧の安定という重大な条件の変化が、生活様式そして生活用品の形態、数量、文様まで波及し、変化をうむ。

明治三十、四十年、昭和二十七年佳例川割子田から縄文式土器、砥石、明治三十年頃、比曽木野の伊勢小松神社敷地より縄文式土器を発掘している。柴立より恒吉に通ずる柴立境で縄文土器出土、国分市上井平岡では塞の神（A・B）など縄文前期の土器が発掘された。

第二章 弥生式文化

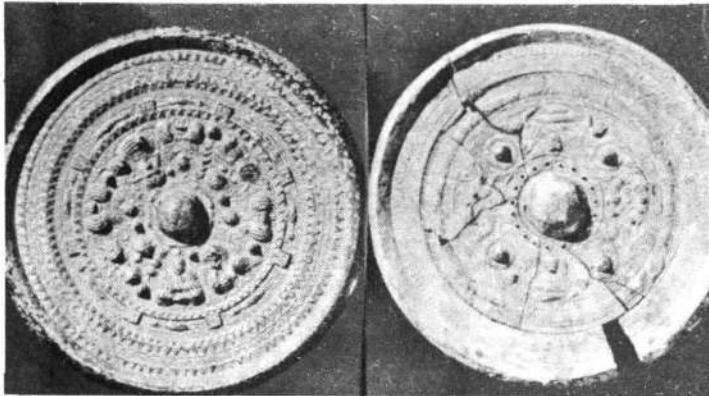
縄文式文化でふれたように、外形が歪みのない自然の曲線を持ち、文様がうすい縄文のうえに波形の幾何学文様がえがかれている。つよくくびれた頸をもつ壺形土器などは農耕生活象徴し、弥生式土器の特色である。

弥生文化は土器分類をもとにして西より東進していったこ

とが知られる。縄文遺物の機能から推論すれば、石皿の多量化はヒエ栽培や焼畑陸耕の存在が立証される。澱粉食のユリ、カタクリ、ヤマイモが打製石斧の多量化現象とみられる。粟・帶文化論も成立し、地母神仰も土偶などと共通のものである。蒸器、貯蔵具用の土器などへの機能の分化がみられる。石皿や打製石斧の多量化や石鏃の減少、土偶・土器の分化など、農耕のはじまりと結びつけなければ理解できないものである。

縄文晩期の東日本には亀ヶ岡式土器のように、華麗で精巧な土器があらわれ、西日本では突帯文土器とよばれる簡素な土器がひろまっている。

東日本や西日本の二大文化相は早くからあった。縄文遺跡が東日本に集中していることから見て、食料のさけ、さすが豊かで、西日本では



左、三角縁神獸鏡
(若八幡古墳出土)

右、三角縁神獸鏡
(石塚山古墳出土)

得にくかったであろう。故に西日本の人々が行き詰った食料(採集経済)から抜け出す方法として、原始農耕を母胎とした、水稻耕作をとり入れたと思える。

縄文時代人の成人人骨をX線で調査すると、多くの飢餓線が見られる。栄養失調的パニックが数回あったことを物語っている。決して平安な牧歌的くらしぶりではなかった。抜歯の習慣や土偶も同じことを裏づけている。

土器のもつ生活上の意義は実に大きい。狩猟や漁撈が生活の中心であった時代と原始農耕から水稻耕作を基本とする時代になると壺、甕、高坏など容器も機能的に進化する。

土器とともに数多くの生活用具が出土する弥生式文化は当然つぎの時代への変容をせまられてくる。

第三章 古墳時代

古墳といえは仁徳天皇・応仁天皇陵の前方後円墳をすぐ連想する。とくに仁徳天皇の百舌陵など周囲約一里ある。巨大な自然の丘陵と見まちがうぐらいである。

古墳には色々の型式があるが、宮崎県西都原の古墳集中量は日本一である。前方後円墳、方墳、積石墳、横穴などバラエティに富んでいる。古墳の博物館といえる。

鹿児島県では東串良町唐仁古墳郡に集中してみられる。そ



吾平山陵（肝付郡吾平町）

のなかで大塚古墳が著名であり、高塚墳の白眉である。

前方後円墳に對して、地下式横穴、地下式板石積石室などは南九州的である。勿論、併存してはいるが、何か異なった文化繼承集團が想定される。

地下式横穴は

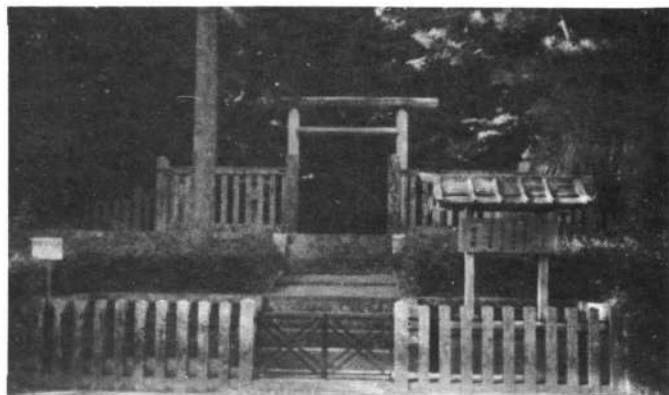
日向地方に分布する古墳時代の遺跡であるが、北限は西都原古墳中に併存している。大隅半島の志布志湾沿岸に分布する古墳群中に併存するものが南限となっている。鹿児島県では伊佐郡、曾於郡、始良郡、肝付郡に分布し、大口市がその西限となっている。地下式板石積石室は川内川流域を南限とし、熊本県人吉盆地、芦北町、天草島本渡市を結ぶ線を北限としている。地下式横穴は地下式板石積石室と吉松町、栗野町、

大口市など川内川上流地帯で分布が重なっている。

地下式横穴または地下式土壇などの文化を保持繼承していた「種族」という疑問がある。それは畿内文化の伝播・末流でなく、高塚文化の流入以前より存在していた。この地下式横穴の文化を傳承した種族こそ、隼人（熊襲）ではないだろうか。大隅の国、分割以前の日向の国に分布しているからである。

日南市宮浦の鵜戸神宮の岩屋、吾平山陵の岩屋にしても同じ型式のものである。

鹿児島神宮の御檀山（神体山）の太支石墓（ドルメン）の型式と唐仁の大塚山古墳は同一のものである。熊本城の黄金の井戸を思わせる積石の円筒形の地下を見ることが出来る。マンホール形の巨大な板石で封じてある。玄室に通じる羨道



高屋山上陵（始良郡溝辺町）

である。

宮崎県で90余か所、鹿児島県では50余か所発見されているこの「地下式土埴」は何を意味しているのだろうか。

球磨、託麻など「クマ」と呼ぶ場所、即ち球磨川より南、鹿児島県曾於郡より北にある地域を「熊襲」とか「隼人」とか「熊曾」とか呼称したのであろう。クマの県、ソの県に挟まれた土地である。

大和朝廷の南下は五世紀はじめとみられる。九州を南下するとき、大きい川の入口、即ち水門（港）を攻略する。延岡



鹿児島神宮の古墳

市に流れる五ヶ瀬川、上流は高千穂峡がある。延岡には南方古墳群があり、国鉄高千穂線に早日渡（はやひと）駅もあり、吉野なる地名もある。つぎに西都原古墳群のある西都市（旧妻町）で、南北約四〇に、大小約二百八十の古墳が点在している。

東の方位に太陽がのぼる場所、つまり「朝日たださす国」、

そこが聖地にあたる。

その聖地は伊勢であり、ヒタチであり、

西都原、国富である。

宮崎市を流れる大

淀川、その上流に国

富町がある。此処が

大和朝廷と提携した

モロアガタノキミの

支配地域にあたる。

大和朝廷は神聖なる場所、即ち聖地を点（橋頭堡）で抑える。

そして現地の豪族と通婚して勢力を扶植して行く。大淀川、

国富一帯に豪族モロアガタのキミが君臨していた。この豪族

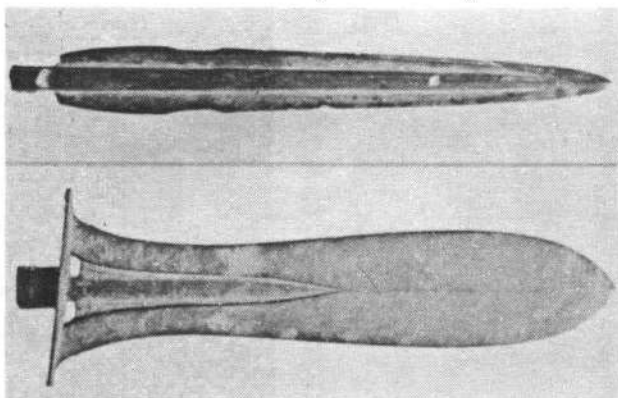
の娘髪長姫が仁徳天皇の妃である。

さらに南下すれば鹿児島県肝付郡有明町に菱田川があり、

東串良町に肝付川がある。そこに塚崎、唐仁、横瀬の古墳群

が点在する。

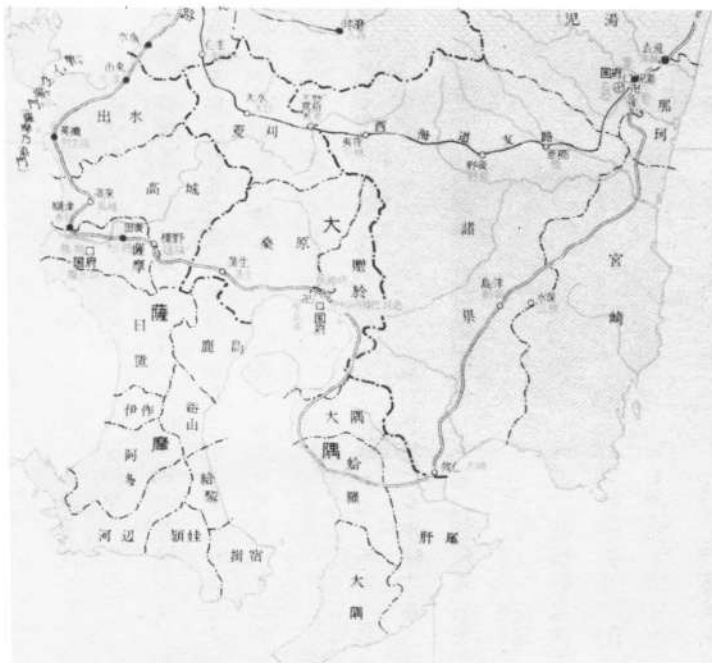
大和朝廷がこれらの征服地から、東征したのである。支配している人々が、支配されている地域から畿内へ復帰すると



上、細形銅剣（春日市出土）
下、広形銅戈（九州歴史資料館蔵）

いう矛盾は、実は太陽にかかわりがある。東の明点、「ヒガシ」とか「ヒムカ」とか呼ぶ。天皇はヒノミコであり、神聖であり、みずみずしい新生太陽への感動であり、感謝であり、畏怖であった。

鹿児島県と宮崎県の前方後円墳の数をみると、宮崎の二百一に対し、鹿児島は二十一にすぎない。西都原周辺の古墳数は約一千といわれる。一番大きいオサホ塚は最大直径二百十



律令体制下の主要地名

九メートルである。メサホ塚は百七十八メートルである。

江戸時代、蒲

生君平は「山陵志」のなかで、

前方後円墳は宮車をまねてつく

ったとの説を発表した。最近で

は「儀式場説」・

「前方部祭壇説」

が有力である。

その宗廟・社稷

・円丘などは祭

祀場に相当する。

大和政権では祭祀儀礼やその施設は見あ

らない。中国では円丘で天神を、方丘で地祇を年二回（冬至

と夏至）祭る。

倭の五王、即ち讃・珍・済・興・武の五王である。四百十

三年から五百二年の間、十二回にわたって南朝に朝貢し、朝

鮮半島で台頭してきた高句麗に対抗し、日本の国際的地位を



長持形石棺（東京国立博物館蔵）

雄略に擬せられている。

福岡県志賀島に出土した「倭奴国王印」がある。光武帝の贈った印綬となっているが、金印朱綬は太子・諸王へ、金印綬は三公へ贈られるものである。

仁德天皇の後イワノ姫の父カツラギソ（襲）ツヒコは恐らく熊襲の平定に功績があったと思われる。葛城氏は武内宿禰の子孫とされている。葛城襲津彦は武内宿禰の子である。

仲哀天皇と神功皇后とが三韓征伐にあたって、朝鮮の「新羅」をうつか、「熊襲」をうつか迷われたとある。熊襲や隼人との接触も同じ時期とみてよい。熊は肥（火）人とみてもよい。

中国の史書「魏志の東夷伝」倭人の条に、二千八字で三世

紀のわが国が紹介されている。

そのなかにある「邪馬台国」の位置については議論百出である。

倭の女王である卑弥呼に崇神

天皇の叔母である、ヤマトトト

ヒモモソ（襲）ヒメノミコト（奈

良県桜井市、箸墓（古市）古墳

に祭る）や景行天皇の妹である、

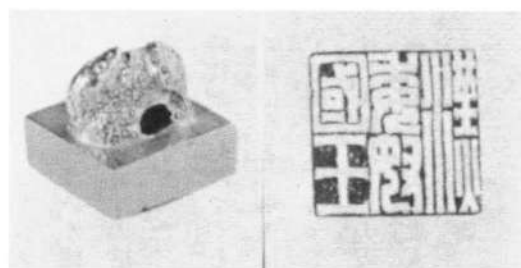
ヤマトヒメなど多くの女性が比

定されている。「親魏倭王」の称

号と金印を贈られたヒミコより

九年前に、「親魏大月氏」の称号と金印を贈られた大月氏王波調がいる。太宰府天満宮蔵の平安初期の写本である「翰苑」に「蛮夷之部」があり、「魏略」が引用され、「魏志」倭人伝に共通の部分が多く見られる。「翰苑」は中国には現存しない。

日本書紀に、景行天皇が山口県、福岡県、大分県、日向へて、高屋に行宮を定め、襲国平定を相談された。襲の国の首長はアツカヤ・セカヤの二人で、娘をイチフカヤとよぶ。共に鹿屋（カノヤ・カヤ）にあたる。その後、景行天皇に再度叛いたトリイシカフミ（川上タケル）がいた。鹿屋も川上も地名が残っている。葦北国造の祖鴨別をして熊襲を討たしむ。カミナガ姫の次妃襲武姫、諸県の君イズミ姫より大御饗を受ける。倭国伝には「邪古」、「波邪」、「多尼」三小王とある。屋久島、隼人、種子島である。日向隼人曾君細麻は日向であ



金印「漢委奴国王」
カンノワノナノコクオウ

印影



ヒノオカ古墳壁画（福岡県吉井町）

り、そのころまでは大隅隼人ではない。ホノスソリノミコトの裔である阿多の小橋の妹は吾平津姫で、神武天皇（カムヤマトイワレヒコ）の後である。川上タケルが誅せられた処が拍手橋（国分市）で、その酋長を大人やゴロウドンともよぶ。時代がくだってくると、大隅、阿多、日向、薩摩、甕隼人の呼称になる。隼人は宮廷では吠声、刺領布（サシヒレ）など、鎮魂呪霊に当たっていた。淀川流域の京都府綴喜郡田辺町大住（大隅隼人）、大阪府八尾市萱振町、奈良県五条市東阿田・西阿田に、大隅隼人や阿多隼人など近習隼人が住んでいたことが、正倉院文書、天平五年・七年の計帳などに記録されている。

倭の五王の場合、宋書、南齊書、梁書などの中国史書に記されているが、内容はややちがっている。讃は応神の諱（イミナ）ホムダのホムと同義語であり、また仁徳の諱オオサザキのサの音、または履中の諱イザホワケのサの音、とする。

弥または珍は仁徳の大が珍の漢訳であり、反正の諱ミスハワケのミの音、珍は瑞の転訛である。済は允恭の諱オオサツマワクゴノスクネのツの転訛。興は安康の諱アナホのホの転化、武は雄略の諱オオハツセワカタケのタケをとったものとされ、済・興・武は異同がない。

熊本県玉名郡船山古墳より出土した銀象嵌（ガン）の鉄製環頭大刀の銘に、アメノシタシロシメシタジヒ□□□ハノ

オオギミノヨとある。大王（オオギミ）の称号は中国にはないので、四・五世紀にはじまって、七世紀の天皇の称号が用いられるまでつづいた。聖徳太子の編集したという国史に「天皇記」、「国記」があり、「隋書」には、

日本からの国書に「日出づる処の天子」とあり、中国

の皇帝に比肩する目的で天皇を用いはじめたのであろう。

三韓征伐の伝説にしても、「任那」の名称が「高句麗好太王碑」に見え、六百年の「三国史記」に見られるが、一方では否定説もある。日本書紀では五六一年「新羅打滅任那官家」とあり、南朝鮮に「任那日本府」は実在している。反面、日本という当時未存在の宗主国が、南朝鮮の一角を「任那屯家」支配することの矛盾を説いている。

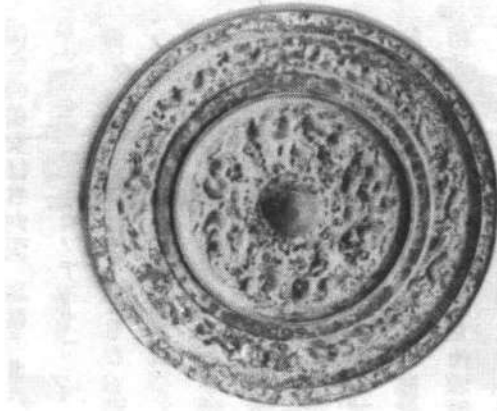


隼人塚始良郡隼人町)

邪馬台国の位置についても、大和説と北九州説とがあり、倭人伝の方向記事からは九州説、距離記事からは畿内説が有利である。大和説であれば三世紀には北九州まで勢力圏にあったということになり、北九州説をとると大和の勢力下になかったということになる。これは日本の国家の成立期を遅らすことになる。

旧満洲吉林省輯安県にある好太王の碑にしても、僅か三十二字（全文は千八百字）の解釈をめぐって諸説がある。倭を主語とするか、広開土王を主語とするか、文節をどこで切るかで、解釈は全く逆になる。この碑はかつての陸軍参謀本部を中心に改ざんされた疑もあり、明確に実証されたとしたら、日本史の一角が大きく崩れることも予想される。

「因幡（イナバ）の白兔」の物語にあるように、出雲地方の豪族は畿内・北九州とならんで独自の文化をもっていた。出



キンジュウサンゲイ文鏡（始良郡隼人町蛭児神社蔵）

雲大社の祭神大国主命が高天原からつかわされた神に出雲の国を献上した神話がある。熊襲（熊曾）と同じく、

北陸地方の蝦夷などが、大和朝廷にたやすく臣従しなかったと思われる。律令制の時代になっても、僻遠の蕃地のまつろわぬやからとして、傍観、懐柔、弾圧

を繰り返かえていた。この時代蕃族または異民族とくに帰化人との対応はどうであったか。八一五年の「新撰姓氏録」〔支配層の豪族のリスト〕では「全体の千五十九氏のうち、渡来人系統と称する氏は三百二十四で、ほぼ三十％である。高度な技術とか、大和朝廷の権威とか、隸属とかでなく、日本、朝鮮という民族的差異の意識なしに、集団移住的に、朝鮮半島と日本列島との間を産業・文化の交流が成立していたと考えるほうが自然である。

仁徳天皇の歌に「道のしりこはだおとめを神のごときこえしかども相枕枕す」という相聞歌（恋うた）がある。「オオソ



弥生式土器

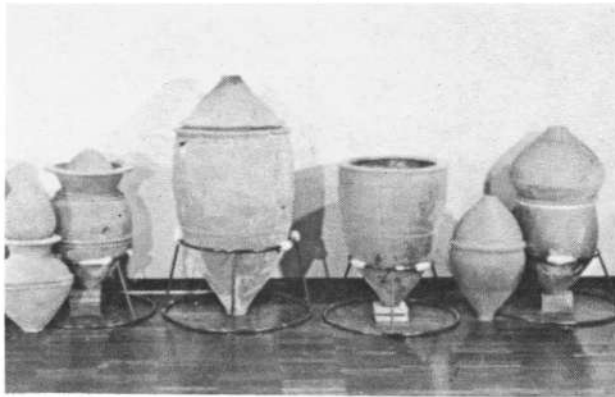
レミヨ」と恋い恋がれた国色の美女は日向国、諸県（モロノアガタ）の君の「牛の諸井」の娘である。国富一帯を諸県（モロノアガタ）といった。

伊井（イヰ）諸尊に蛭児という御子あり、三歳になってもなお脚が不自由であった。尊はこの蛭児を天岩樟船に乘せて流してしまった。その船が漂着した場所が始良郡隼人町内にある蛭児神社である。この蛭児漂着説は加治木でも同型である。柳田国男著「うつば船」の一文を引用してみよう。「美しい少女が龍宮から人界にとついできて、子をもうけてのちふたたび水界に帰る。豊玉姫以来の龍宮女房型の説話、また水の神の贈物としての小童の思想と相通ずる。この伝説には九州の原田一族・伊予の河野氏・備前の宇喜田氏等の古い移住者の家筋を語るものが多く、この信仰自体西南の海上より、わが列島に流れてきたらしい。大隅正八幡の本縁として古く記録された物語りは、七歳の少女が父を知らない男児と「うつば船」に入れられて、唐から流れついたものを神に祭り、北方の八幡縁起とは異ったものである。母神の名を大比留女（オオヒルメ）といい、のちに筑前若梶（ワカスギ）山に飛び入って、香椎の聖母大菩薩と顕われたまい、王子は大隅にとどまって正八幡宮をいつかれた。大比留女の名はすでに男山社においても記録され、朝家の認定と両立せざるを憚って、次第にこれを南端の一社におしつけたのであろう。故に記紀に伝える応神天皇や神功皇后の事蹟は後世に附会されたものであるこ

とは、ほぼ疑の余地がない」とある。蛭児神社は正八幡について大隅二之宮と呼ばれ、境内には珍らしい金筋竹と大楠とがある。竹は茎に金の筋があり、蛭児の釣竿とか水桿といい、大楠は漂着した天岩樟船の活着したもので、加治木（舵木）・梶木の由来と同例である。享保十三年八月、国分地頭であった樺山主計久初（カバヤマカズエヒサモト）（墓は松原山実性院の東南卵塔井垣の内にある）が「神代楠が朽倒したので、稚樟を代植させた」と記録している。この享保十三年（一七二八）に植樹された楠が朽倒した神代楠をかばうかのよう

にそびえている。社の

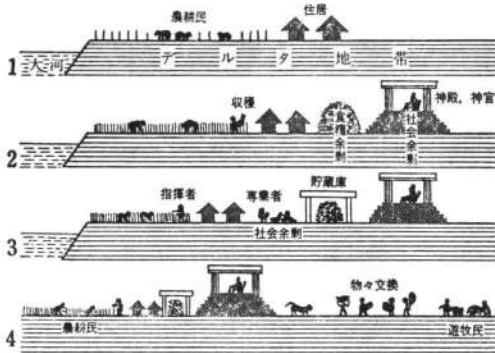
東の肥薩線の線路をはさむようにして神代古跡がある。ここを開墾しているときに古鏡が数面出土している。一面は海獣葡萄鏡である。古墳時代に属する漢式鏡よりも、奈良時代に属する唐式鏡が絶対多数をしめている。他の鏡は中国製でなくて、和製（倣製）であるよ



かめかん（九州歴史資料館）

うだ。とにかく五世紀から八世紀にかけての遺物が、この地方の政治・文化・経済を推論するうえで、無視することのできないものであろう。この海獣葡萄鏡と酷似するものが千葉県佐原市、香取神宮に一面あり、福岡県玄海町の宗像神社の沖津宮祭祀遺跡出土品の中にもある。奈良の高松塚古墳にも出土している。奈良正倉院の海馬（トド）葡萄鏡に酷似しているのが香取神宮の銅鏡である。

「幸ふる」（つきがよい）という思想は海幸の鈎を失った時、あの鈎でないとどんな立派な鈎でも受取れないと拒絶されたことでもわかる。海幸は一生、漁獲の好運に見放されるといつている。サ



国家の発生まで 1. 集団で生活する農耕民。2. 食糧余剰が社会化し、それを管理する神官がうまれる。3. 社会余剰は、専業者をうみだす（分業のはじまり）。4. 他の集団（遊牧民）との物々交換が行なわれ、国家の体裁が整う。

（今西錦司著、世界の歴史Ⅰ）

キまたはサチという発想が生活と密着していた。水田農耕に不可欠な共同用水。その用水の運営・維持、すべて一定の指導者の存在が想像される。

水の調節からくる能力が潮みつの玉、潮ひるの玉で代表される。尊の実力の前に降伏した兄ホノスソリノ尊は「われワザオギの民となり」と臣従した。ホノスソリノ尊はアタノキミ、ヲハシの祖である。平安京址出土、宮

崎総合博物館蔵の隼人の楯の絵は幸ふる鈎を象徴するものであろう。



鹿兒島神宮の御祭神はホノオリノミコト・アマツヒタカヒコホデミノミコト・ヤマサチヒコなどの御名でよばれている。山幸とは「ケノアラ

モノ・ケノニコモメ」を狩猟し、その代表は鹿である。鹿を鹿兒と作る。銅鐸の刻彫に鹿の図柄がある。

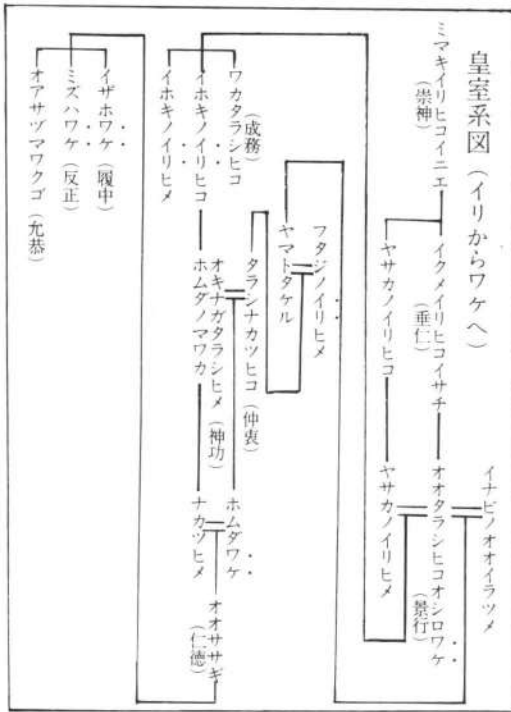
四・五世紀は謎のペールに包まれている。外国から日本に



鹿兒島神宮（始良郡隼人町）

舶載された銅鏡のなかに前漢（一世紀前後）まで遡るものもある。日本でまねてつくられたイミテーションの鏡は文章の体裁をなさぬものもある。

奈良県天理市東大寺古墳出土の後漢「中平」（一八四―一八九）年銘の大刀がある。天理市石上（イソノカミ）神宮所蔵の「泰和四年」（三九一）の七支刀（シチシトウ）銘文がある。前章で述べた熊本県江田船山古墳出土の大刀銘文がある。五世紀後半の古墳とされている。文中の「弥図齒（ミズハ）大王」と読むとしたら、百済の「蓋鹵（コウロ）大王」（在位四五五―四七五）もそれに該当する。単純に日本での文字使用例とみなすことはむずかしい。



百済王代に王仁が「千字文」

を日本に献呈し、

それを教習せしめた。記紀で

は応神天皇の御

代となっている。

六世紀前半、梁

の武帝のとき、

「千字文」はつ

くられた。

大同二年（八

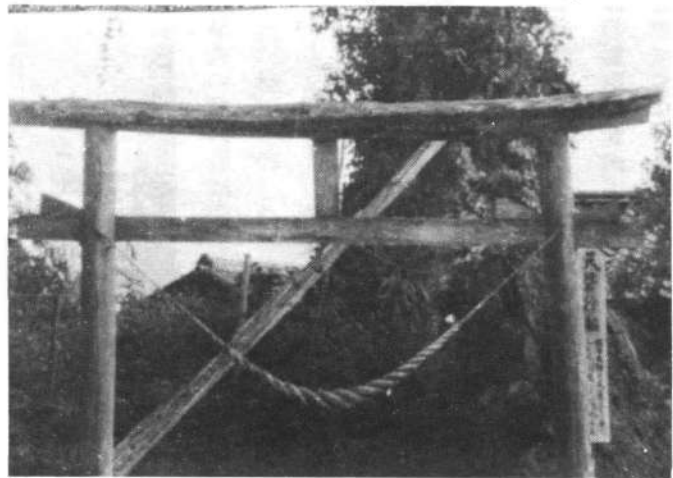
〇七）に齊部広

成（インベヒロ

ナリ）が「古語拾遺」をあらわし、「上古の世いまだ文字あらず、口々に相伝う」とあるが、口誦・伝承は現代も生きつづけている。

新井白石は史家の態度について「僭踰（せんゆ）にわたるといふども」とか、「疑を疑とし」とのべている。簡単に結論を出すことも、逡巡することも、いずれも最善ではないと。

大宝元年（七〇一）の大宝令によると、唐と新羅に大事をのべる時は、「明神御宇日本天皇」（アキツカミトアメノシタシ



あまのいわくす（蛭児神社）

ロシメスヤマトノスメラミコト」と名のり、次事をのべるときは「アキツカミトアメノシタシロシメスメラミコト」と称し、国内で朝廷の大事をのべるときは「明神御大八洲天皇」（アキツカミトオオヤシマノクニシロシメスメラミコト）と称すことを定めている。

六七二年の壬申（ジンシン）の乱以降、天皇を神とする神統意識が定着して行く。



高千穂宮跡（始良郡隼人町）

「万葉集」のなかに、「皇は神にしませば天雲のいかずちの上にいほりせるかも」と柿本人麻呂によって持統天皇が表現されている。大伴御行は天武天皇を「皇は神にしませば赤駒のはらばう田居を都となしつ」と歌っている。天武天皇は「皇（スメラギ）は神にしませば」とか

「王（オオキミ）は神にしませば」とか二つの流れが意識される。

和歌山県橋本市の隅田（スタ）八幡宮蔵の人物画像鏡の銘文に「癸未年（キビ）」と「大王」の文字がある。癸未は四四三年と五〇三年に相当する。

大王は高句麗（コウクリ）では四世紀末、百濟（クダラ）では五世紀の後半に使用されているので、日本の場合でも六世紀直前には使用されたと思われる。

雄略天皇が葛城（カツラギ）山で狩りをした時、葛城の主である一言主（ヒトコトヌシ）との出会いがある。自分以外に倭国に王者はいないと思っていた雄略天皇が、太刀や弓矢、衣服までぬいで、一言主の前にひれ伏す場面が「古事記」にある。神威に屈する雄略天皇と儒教の神仙思想の神に相当する雄略天皇の二面的表現がみられる。「日本書紀」になると同一人物の場合でも表現が変わってくる。

「魏志」倭人伝に「停喪十余日、肉を食わず、喪主哭泣（コクキユウ）し、他人就いて歌舞飲酒す。葬れば挙家水中にいたりて澡浴（ソウヨク）し、練沐（レンモク）の如くす」、「棺あれども槨なし」とある。天皇の死去の場合、殯宮（モガリノミヤ）で喪儀が行われる。

天武天皇の場合、喪儀は二年二か月、持統天皇の場合一年もつづいた。さまざまな誅（しぬびごと）や歌舞が献呈され

る。埋葬がすんだら人々はみそぎをして、喪服を水で洗う。木棺で埋葬した場合、粘土槨の部分だけのこり、木棺は腐ってなくなる。倭人伝は石の覆いをしないで、木棺を埋葬することをいったものである。

朝鮮でも日本でもこの風習は現存している。ただ朝鮮の場合、哭泣する人として女性が多数招かれて哀号する。沐浴など全く同じ慣習である。

「書紀」に雄略天皇崩じたまひし時、タジヒノタカワシハラノミササキに葬り奉るや、隼人昼夜、陵側に哀号して、食を与えるも喫せず、七日にして死す」とある。天皇近習隼人たちであろう。誅の期間中、邪霊の侵入、蘇生の防止、後継者の権位再確認の目的が存在していた。

殯（もがり）は「もあがり」の意味をもち、魂が昇天することを意味する。神道では「棚あがり」ともいう。滞留していた死者の魂が昇天するという意味で、俗にいう「通夜」にあたる。

鎮魂に三つのばあいがある。「魂振り」と「魂触れ」と「魂鎮め」である。

「日本書紀」に「タマヨバイ」によってよみがえったウジノワキイラツコとオオサザキノミコとの対話がある。同じくイザナミの「もがりのところ」で死せるイザナミがイザナギと「生けりしときの如くにして出で迎えて共に語るの」は「タ

マフレ」であろう。「古事記」や「日本書紀」のアメワカヒコのもがりで、キサリモチ、ハハキモチ、ミケビト、ウスメ、ナキメ、モノマサ、ユウズクリ、シシビトが「八日八夜」のあそびは、鎮魂葬送のさまをよくあらわしている。

その殯（もがり）は階級によって長短があったことは勿論である。一般庶民は十日以内であろう。

殉死の風習も大化二年（六四六）の詔に「絶対禁止」が示されている。喪屋をつくり、なかに柩をおき、食膳を供し、楽を奏し、歌舞をする。一週間昼夜つづける。それに相当するものに石人や埴輪（ハニワ）を仕立てる。埴輪は葬送の行列を表現しているという学説もある。

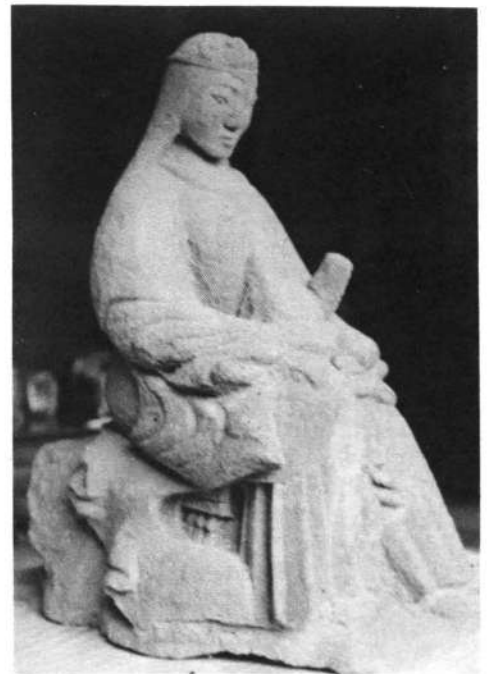
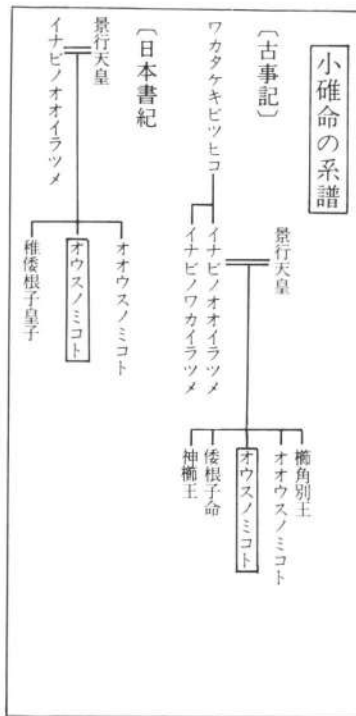
古代における物忌みの観念は嚴重で、積極的にミソギ・ハライが要求され、清潔が善、不浄は悪に通じるのである。物を生成、発展させるのが善、または吉で、その逆が悪であり、凶にあたる。大祓ののりの中に、アハナチ、ミゾウメ、ヒハナチ、シキマキ、クシサシ、イケハギ、サカハギ、クソヘ、イキハダタチ、シニハダタチ、シロヒト、コクミ、オノガハハヲオカセルツミ、オノガコヲオカセルツミ、ハハトコヲオカセルツミ、コトハハトヲオカセルツミ、獣姦の罪、昆虫の災、高津神の災い、高津鳥の災など、生理的、道義的、自然的災害まで罪の観念をもち、醜惡とみなしていたのである。

五世紀後半の雄略天皇が神仙的な神と融合してくる理由の

一つとして、世襲王制の確定化がみられる。王から大王（オオキミ）へ、大王から天皇へ、古墳巨大化の路線のなかに、倭王権の推移がみられる。三輪王朝から河内王朝への転換である。

「日本書紀」がとくに景行天皇の九州征討を特筆したのは、景行天皇の功績を強調する目的があり、「オオタラシヒコ」という「タラシ系」のおくりなをもつ、この景行天皇を、「イリ王朝」の後継者にふさわしい王者として位置づける必要があった。

古代文学の傑作といわれる「倭建命」の説話がある。「古事記」ではその生年や没年は明白でないが、「日本書紀」では景行天皇の二十七年一〇月、熊襲征討、十六歳で西征を終って、すぐ反転して東征に向う。景行天皇の四十年に大和を目前に



神功皇后石像（鹿児島神宮蔵）

して能煩野（「紀」では能褒野）で病死、ときに三〇歳とある。「ノボノ」の字も「記」と「紀」で異っている。

ヤマトタケルノミコトを「記」では「倭建命」、「紀」では「日本武尊」と書く。「倭」より「日本」の方が時代的に新しい呼称である。

倭建命・日本武尊の称は「記」・「紀」にあるように、熊襲の首長（「記」は熊曾建、「紀」は川上梟帥）が惨死のさいに献じた名である。以前の倭建命を「記」は小碓命（オウスのミコト）とする。「紀」では敗者奉呈前に「日本武尊」という表現を用いている。